

【キーワード】

〔施設種別〕☐高齢者施設 ☐障がい者施設 ☐子ども施設 ☐住宅（住宅型ホテル） ☒地区の家，他
 〔運営主体〕☐市区町村 ☐法人 ☐NPO ☐個人 ☒社会的協同組合
 〔建物形式〕☒1棟単体型（分散） ☐複数棟集合型 ☐団地型 ☐集落
 〔建物状況〕☐新築 ☐増築 ☒改修 ☐一部改修 ☐既存
 〔対象者〕☐高齢者 ☐障がい者 ☐子ども ☐ファミリー ☒多世代 ☒移民



入り口付近から見た地区の家

アレッサンドリアの旧市街の中心部に立地する。2010年に民間倉庫を借り受け、1年の準備期間を経て Casa Di Quartiere Alessandria が2011年に開設した。誰もが無料で使うことができるミーティングスペース、体育館、ジム、カフェ、倉庫を設け多様な活動を行っている。2016年には向かいの空き工場を借り受け、コワーキング、工房などを行う PORTO IDEE を開設した。

視察月日 11月5日

記録担当者 松原茂樹，佐藤栄治

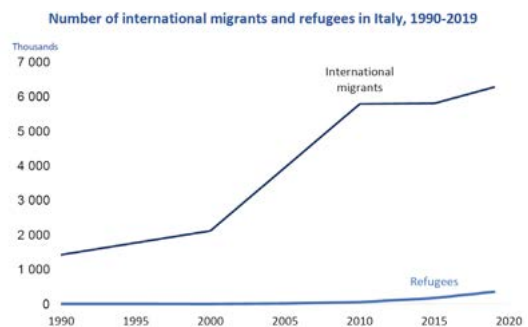
案内者 ファビオ・スカルトウリッティ氏（社会的協同組合 Associazione Comunità San Benedetto al Porto，アレッサンドリア支部の代表）

フェデリコ・マルコ氏（21歳，大学生で，協会活動に加わって実習中）

多木陽介氏（通訳）

1. アレッサンドリア市の現状

アレッサンドリアをはじめ，イタリア全体で移民人口が増えている^{注1)}。イタリア全体での移民数は，1990年には1428.2千人であったが，2000年には2121.7千人，2019年には6273.7千人と増加し，2019年にはイタリアの総人口の10.4%を占めるに至っている。また難民も増加し，2010年には56.4千人だったが，2015年には177.2千人，2019年の統計では354.7千人と総移民人口のうち5.7%を占めている。



Source: UN DESA (2019a), UNHCR (2018) and UNWRA (2019)
 図1 イタリアの移民・難民人口の推移

注1) <<https://www.un.org/en/development/desa/population/migration/data/estimates2/countryprofiles.asp>>

注2) DELIBERAZIONE DEL CONSIGLIO COMUNALE DELIBERAZIONE N. 61 / 182 / 278 / 1410M

注 3) Associazione Comunità San Benedetto al Porto (サン・ベネディット・アル・ポルト コミュニティ協会), <<http://sanbenedetto.org>>

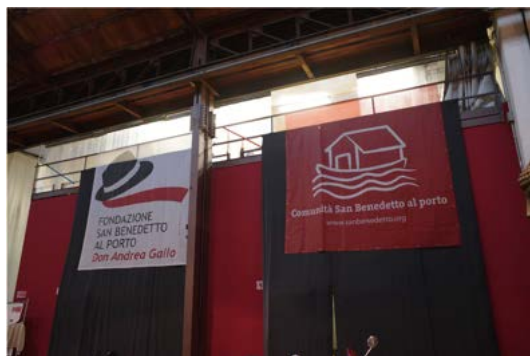


写真 1 アソシエーションの旗 (右)



写真 2 壁に貼られた Don GALLO 神父の写真・イラストとファビオ氏



写真 3 地区の家 (左) と PORTO IDEE (右)



写真 4 地区の家の外観

アレッサンドリアはトリノから列車で 1 時間ほどの位置にある都市であり、基礎自治体としての周辺集落を含む人口は 2017 年 6 月 30 日時点で 94,185 人である。他の自治体と同様に長引く不況に直面しており、アレッサンドリア市議会は 2012 年には財政難を決議した^{注 2)}。

2. 地区の家「Casa Di Quartiere Alessandria」の立ち上がりの経緯

ファビオ・スカルトウリッティ氏はアレッサンドリア出身であり、ジェノヴァを本拠地として活動する^{注 3)}に所属している。ファビオ氏は、このアソシエーションの代表である Don Andrea GALLO 神父 (1928-2013) と 20 年ほどともに活動をしており、神父から指示を受けてアレッサンドリアでのソーシャル活動を行い始めた (写真 2)。母体である Associazione Comunità San Benedetto al Porto は約 50 年前に Don GALLO 神父が始めたアソシエーションで、ホームレスや移民、暴力を受けた人、人身売買の被害者など弱い立場の人の生活を支援する活動を行っている。マザーハウスはジェノヴァにあり、ミラノ、ヴェローナ、アレッサンドリアに活動拠点を構えている。なお、ファビオ氏が現在代表を務めている。Don GALLO 神父は、自らを Prete da marciapiedi (路傍の司祭) と称し、所有物はベッド一つだけというほど清貧を貫いた社会的活動家として知られ、誰からも慕われていた (写真 1)。権威に大して従順な人間を育てるファシズムに反対し、レジスタンスとして活動した経験は、彼の「批判的精神」を育てたという。共同体活動での神父の教えは、共同体みんなのしあわせを考え、どんな町でもそこにいる人の繋がりを創ることである。そのためにどんな人とも話し、またどんな人の話も聞くが、まずいちばん弱い立場の人の話を聞くことを大切にしていた。

ファビオ氏がアレッサンドリアで活動を始めたとき、活動の拠点として、使っていないパブリックスペースを使わせて欲しいと行政に伝えたが、そのときはちょうど

空き物件がなかったため断念した。その後も私有地を探し求めたが家賃が高く、最終的に 2010 年に現在の旧民間倉庫を見つけ、家賃 1500 ユーロ / 月で借りている。ここは旧市街地の真ん中であり、間口も広く誰でも簡単に入ってこられることから、立地、建物の条件ともに理想的な場所であったという(図 2, 写真 3・4)。この物件は、元々資材倉庫であり、中に様々なものが残されたままに

◆ コラム 3 Associazione Comunità San Benedetto al Porto

この協会は、サン・ベネディット教会の司祭としての活動をもとに、立ち上げられた共同体が元になっている。協会では、人間関係、文化、仕事 relazioni, cultura, lavoro を 3 本柱として、「積極的アプローチ」による介入支援を行っている。この「積極的なアプローチ」は、従来の単純な福祉的、垂直的、臨床的治療的な性質を持つ介入モデルに代わるものとして定義されており、支援者らは被支援者本人を中心に据え、選択と自己決定の能力を重視し、自分自身の生活を自ら大幅に改善するモデルを共有している。これは、オーストリアの実存神経精神科医ビクトール・フランクル博士による『人間の意味の探求 Man's Search for Meaning』に紹介された、プロアクティブ Proactive の概念：状況や文脈に関係なく、勇気、忍耐、個人の責任、選択の存在を意識することが重要、という考え方に端を発している。

■人間関係

協会は、自らの支援活動の目的を、依存と不快感のメカニズムとの関連性を読み取る「受容のメカニズムと関係的な効果的な封じ込めのメカニズム」を活用し、世界とその関係性を再構成し、心理的条件と肯定的な関係の文脈をつくること（そして、自分自身を社会的文脈へと拡大していく）、集団の中で自己管理や徐々に責任を負う傾向を育て、社会的モデルやルールを受け入れ、批判的意識を持ちながら自分の選択や行動を自己決定する

能力を身につけることであるとしている。

■文化

協会は、社会で起こる大きな変化を注視するための「批判的な良心」を育てることを重視している。このため、“文脈や、参照するモデルに興味や好奇心、緊張感を持たないときには、批判的な思考はできない”という考えにより、広義の文化的活動に取り組んでいる。この文化的活動には、本や新聞を読むこと（の支援）、演劇の練習、会議、学修コース、イベント、研究活動などへの参加、が含まれる。

■仕事

協会の活動のなかには、例えば酒やドラッグの依存症患者の更生と社会復帰支援、移民の地域定着支援等が含まれるが、こうした活動で「就労支援」が重視されている。これは、“仕事は、人間関係が強化され検証される領域 territorio となる。そこでは尊厳と自尊心が回復され、共通の善と目的を達成するための緊張感の中で自己を活性化させることができる。”という思想による。

■コミュニティ・テリトリー

こうした思想は、啓蒙思想や合理主義に疑問を持ち、また個人の発達や文化に関心を向ける批判理論に特徴付けられるフランクフルト学派や、一切の理論的先入観を持たずに事象／存在者そのものに接近して還帰を目指す現象学派の流れを汲んでいる。協会は、固定的なテリトリーの中のコミュニティではなく、コミュニティがテリトリーを形成するという方向を共有する。このコミュニティ・テリトリーをつくり、そこで対象者が統合と関係性の発展を体験できることが目指されている。

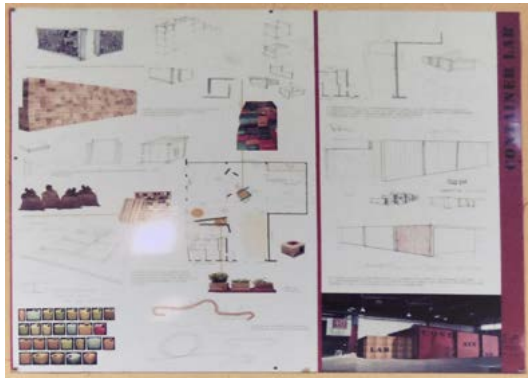


写真5 住民と考えたコンテナ状のボックスの提案

どんなアイデアが地域住民とのディスカッションで出され、検討を重ねられて実現したかが、パネルにされて壁面に掲示されている。記録として残されることで参加者はプロセスに誇りを持ち、自分たちのスペースとして愛着を抱くことができる。また、あとから参加した人々にとっても、場所の経緯と文化を共有できる仕掛けとなっている。これも「ドキュメンテーション→p.38」の一種であり、社会的事業の文化として根付いていることがわかる。



写真6 ミーティングスペースの配置



写真7 ミーティングスペースのボリューム

なっていたため、片付けて使えるようになるまで1年間かかった。また改修のために民間のファンドを集めて45万ユーロを確保した。

3. 地区の家の活動

1) 住民参加による場所づくり

倉庫の片付けと同時に地域の人と整備の準備をはじめ、ここで何ができるのかを議論し、みんなに提案を公開した(写真5)。ここは、公的な位置づけを得ている施設ではなく、端的にはソーシャル事業の事務所であるが、地域の人々の関係づくりの拠点としても、人々の主体性や関与を引き出す思想が徹底されている。

2) 建物の概要と使われ方

元倉庫である、スパンがとんだ広い空間を活かして、オフィス、ミーティングスペース、体育館、カフェ、ジム、資源倉庫と仕分け作業所、など多様な場が設けられている。各スペースの間はビニールカーテン等で仕切られて



図2 周辺の立地

いるだけで、緩やかに全体がつながっている。この建物を2010年に買い取ってから各種の準備を重ね、2011年にオープンした。全て安全基準をクリアしないと一般の人を入れられない。厳しいものはあった。

■オフィス

仕事の場合は地域・現場にあるので、デスクにスタッフががいることはほとんどない、このためオフィスはごく小さくて良い、という考えから、オフィスは最小限の大きさで設置されている。

■コンテナを利用したミーティングスペース

地域住民との議論のなかで出てきたアイディアの実現例の一つが、地域の人の提案で設置された、コンテナを利用したボックスである。倉庫は広く、天井も高いために温熱環境や音環境の観点では不利だが、地域の中に、常に暖かい場所をつくりたい、という思想があった。このコンテナを改造したボックスによって、断熱・防音を確保したスペースを確保できた。

このボックスは主にミーティングスペースとして使われ、午前はイタリア語の講座、午後は放課後学習の場として利用されている。内部はかなり広く、ここでは市民のアソシエーションが集会をしたりレクチャーしたりとさまざまな活動も展開しており、最大100人程度の会合を開くことができる（写真6～8）。なお、移民等を対象に開いているイタリア語の講座は、現在は100人以上が申し込みをしている。また放課後学習に来る子どもは15人であり、これらの講座や機会はすべて無料で提供されている。

■体育館、カフェ、ジム

他にも、市民が無料で使うことができるスペースとしてテーブルホッケー台が置かれた体育館やコーヒーなどを提供するカフェバーもある（写真9, 10）。倉庫の上は、ジムとして使われている（写真11）。

■資材置き場

資材（衣類等）置き場があり、ここに毎日市民や潰れた洋服屋さんから大量の衣類が集められている。そして、精神疾患などの人たちの就労事業として、それらの分類・整理の仕事が行われている（写真13）。ここで整理した衣類や物品をアソシエーションが運営するリサイクルショップ、セカンドライフで販売したり、無料でカトリック系の組織に寄付している。

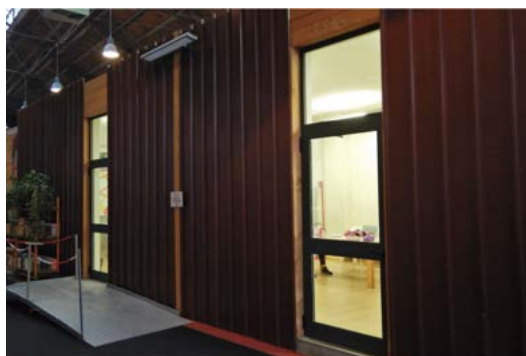


写真8 ミーティングスペース内部



写真9 体育館



写真10 体育館とカフェバーの配置

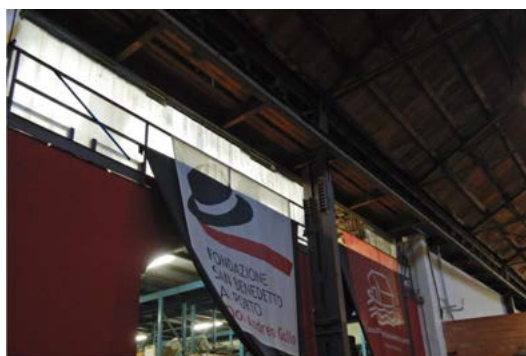


写真11 倉庫の上のジム



写真 12. カフェバー



写真 13. 資材置き場



写真 14. 「お隣さんマーケット」のちらし

3) 地区の家の活動

地区の家では日常生活の調停と支援を行う活動を行っており、あらゆる市民から相談を受けている。たとえば家庭内暴力や仕事が見つからないこと、仕事を探しにアレクサンドリアに来たが泊まる場所がないなどの各種の相談が年間 2000 件ぐらいある。

また、月に 1 回市民のフリーマーケット、「お隣さんマーケット」を行っている(写真 14)。毎回の定員は 100 ファミリーで、抽選で出店者を決める。各ファミリーが自宅等で余ったものを出品し、品物の値段は各ファミリーが決める。出品するものは何でもよいことになっているが、90%が衣類で、10%がそれ以外のものである。出店料は 5 ユーロと安いので、参加希望者が多い。このため毎回 30-40 ファミリーは抽選から漏れてしまうが、抽選から漏れたファミリーは次回に参加する権利があり、毎回同じファミリーが出展することにならないように工夫している。このマーケットの開催は、アソシエーションとしては収入にはならないが、住む人も働く人も何らかの「繋がり」ができることをテーマとし、こうした機会はこの地区を盛り上げる投資として位置づけている。

これらの活動以外にも毎週火曜日には食料の配付を行う活動、シフトを組んで夜回りをして、寝泊まりに困っている人がいないかをみたり、違法な売春が行われているならば(多くの場合は騙されて連れてこられ、働かされている女性であるため)声をかけて支援が必要でないかを尋ねる活動などを行っている。必要であれば保護し、支援に繋げる。近年ではだまされて連れてこられたナイジェリアの女性たちが多い。また、こうした移民・難民等へのイタリア語の学習だけでなく、職業訓練としてセカンドライフで裁縫の訓練を行っている。

このように、アソシエーションの活動は市民への日常的な居場所の提供やつながりの機会の提供にとどまらない。また、支援を必要とする人の訴えや依頼を待つだけでなく、街に出て支援を必要な人を探すという積極的な保護活動から、自立支援に向けた各種のサポートまで、一連の活動が行われている点が特徴的であり、「地区の家」はその拠点としても機能している。

4. 地区の家とアソシエーションの運営

1) スタッフ

地区の家を拠点に活動しているメンバーには、8人の有給スタッフと12人のボランティアがいる。各事業の現場にそれぞれ散っているので、メンバー同士がなかなか顔を合わせないこともある。アソシエーション(のうち、アレッサンドリア支部)は、毎年さまざまな事業委託等や助成金により、12万ユーロの資金を集めている。ここから家賃や人件費を支払っているため、スタッフの生活を考えるとやりくりは楽ではないが、好きな仕事を好きな仲間とできて贅沢できないけど過ごしていけるので気にしないそうである。



写真 16 入り口付近から撮影した内観：右にコンテナ状のボックス、左に集会スペース

注 4) <http://www.portoidee.eu/web/porto-idee/>



写真 15 Porto Idee の外観



写真 17 日干しブロックのディテール

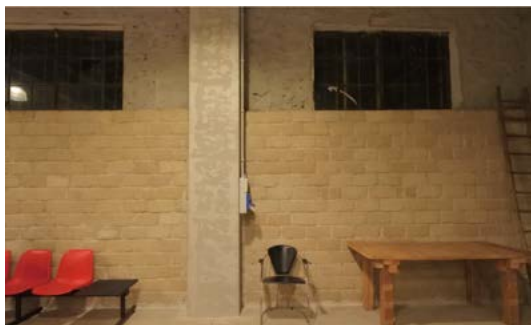


写真 18 壁一面に取り付けられた日干しブロック

2) 事業内容

委託事業の一つとして、州や市から資金を受けて夜間のパトロールを2チーム(各4人)で行っている。1チームはホームレスの人に対し寝袋を提供する取り組みを行っている。また、いらなくなったキャンピングカーを2台もらい、市の許可を取ってその車を街の中の2箇所において、寝起きできる場所を提供している。例えば先週のパトロールでは野宿していた人は14人いた。こうした人たちに声をかけ、野宿がつかいようであれば、今はキャンピングカーに3人が泊まっている。もう1チームは、先述の売春を行っている人のケアをしている。

3) 資金繰り

地区の家として拠点を構えた当初のアソシエーションの収入は80%が公共からの資金、20%が民間の資金で構成されていた。現在では55%は公共からの資金、45%は民間の資金(寄付や、銀行やファンドからの資金)で構成されている。ファビオ氏は、以前は民間営利団体はソーシャルな活動はしていないという認識であり、民間営利団体とは協働関係をつくってこなかった。しかし、後述するコワーキングスペースを運営する団体と知り合うことで、営利を前提とする民間団体でもソーシャルな取り組みをしていることを理解した。こうした機会を得て、町のお店や他のアソシエーションと協力することで、いろいろな人と出会うこともでき、町の人が困っていることに目を開け、新しい可能性が広がる、と考えを変化させていった。その結果が資金構成の変化に表れている。

5. コミュニティセンター、Porto Idee の活動

1) 建物の概要

■開設の経緯

地区の家を開設後、道路を挟んだ向かいにある、約700㎡の工場を借り受けた。工場は閉じてから2年間空

き家であり、屋根が壊れ、排水もよくない状態の建物であった。10年契約で借り、最初の1年目は大家が無料で使わせてくれて、2年目からは年間12円の契約をしている。この建物を15万ユーロで改修し、Porto Idee（意：アイディアの港）と名付け、2016年3月に開設した。改修費15万ユーロのうち5万ユーロを市が提供し、部分的に市がスペースを借りている。この取り計らいは、これまでの地区の家等の取り組みを市が評価してくれたことによる。

■空間構成・諸室

建物の空間構成としては地区の家と同様入れ子状にコンテナ状のボックスを設置している。入り口そばには就業のための相談・支援窓口がある。

その奥にカフェスペース、修理工房がある。通路を挟んで反対側に集会スペースがある。その奥に2018年の改修で間仕切りを設けたコワーキングスペースやfablabがある。

■特徴的な内装

改修資金が潤沢ではなかったもので、一部DIYで改修を行った。建築業者に教えてもらい、簡単な機材で作ることができる、麻と石灰と真水を混ぜて日干ししてつくるブロックを壁の仕上げ材として積んでいった。このブロックは材料は自然素材で、日干しで乾燥させるので製作にエネルギーを使わない点、軽くて断熱・防音効果があり空気が通る点に特徴がある（写真17・18）。このブロックは水にも強く、乾くと外壁にも使える。近年では、建物の建築や改修にこうした技術を使った事例が増えている。どこでも使えるので、資金のない現場での採用が増えているのだが、Porto Tdeeのような、人々が集まる場所でこのような素材が使われていることは、自分たちでもこんな改修ができる、住環境の改善を自分たちでもしよう、と地域の人々に思わせるきっかけにもなっている。

開設当初は資金がなくて各スペースを仕切る扉もなかったが、2018年には民間のファンドを得て、約3万ユーロをかけて間仕切り壁を設け、コワーキングスペースの居住環境を改善した。

2) 活動内容

この場所は、一言でいうと「仕事をテーマにしたコミュ

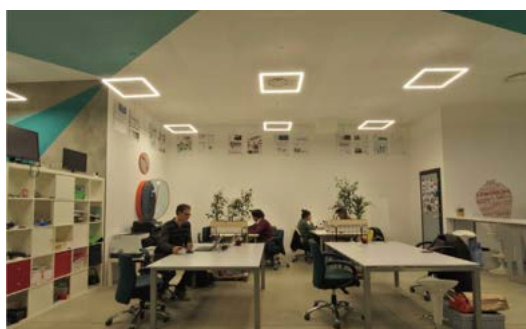


写真19 コワーキングスペース

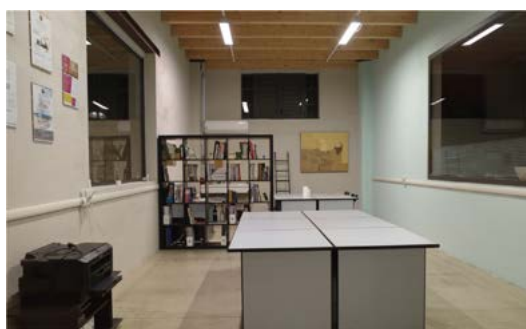


写真20 コワーキングスペースの打ち合わせ室：左にfablab、右にミーティングスペース

これらの個室は、コワーキングスペースの会員がミーティングしたい時に予約制で使える。

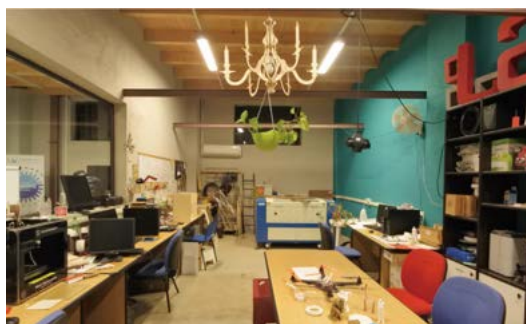


写真21 fablab

ものづくりをしたくても個人ではなかなか持てない、3Dプリンタ、レーザーカッターなど最新の機材を提供し、使用方法のサポートもしている。ビジネスとして経営されるファブラボもあるが、ここはボランティアベースで、儲けのためではなく、挑戦したい人に機会を与えるという趣旨で運営されている。よく、大学の人たちが試作品を作りに来る。ここのファブラボ独自のプロジェクトとして、障害者のための自助具を作成している。これまでに、ショップの警備用のプログラムとそれに連動するガジェット、プログラムAmazon Go（どの棚から何をとってもビデオカメラで認識するプログラム。無人コンビニに採用されている）、自分で話すことができない病人などが装着すると、その精神状態や鼓動の変化を察知して支援者にアラートを送るヘルメットなどが、ここで開発されてきた。



写真 22 入り口付近に配置された、就業のための相談窓口（ガラス部分）

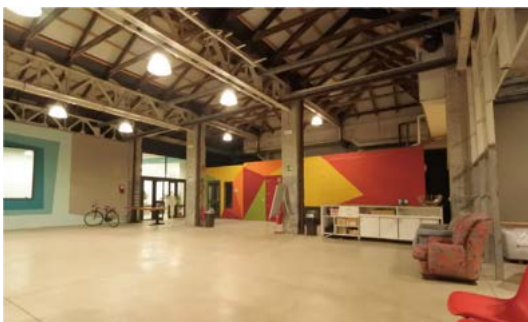


写真 23 集会スペース

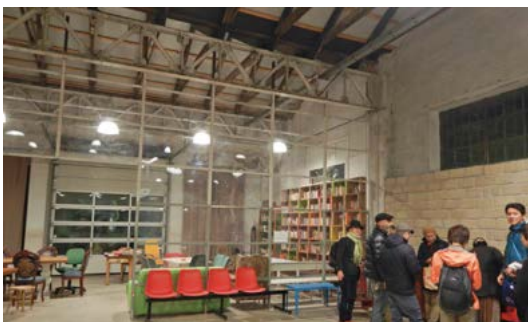


写真 24 道路に面して設けられたくつろぎスペース

ニティセンター」である。ここでは5人のスタッフが働いていて、主な活動は6つある。コワーキングスペースの運営活動、3Dプリンターなど道具を提供するfablabの運営、DIYで修理などができる工房（写真19～21）、就労支援のためのファーストステップのための窓口活動（写真22）、さいごに250人程度が入れる集会スペースの運営で、この場所を企業等への貸し出しや、市民のコンサートなどイベントへの貸し出し、企画支援を行っている（写真23・24）。

コワーキングスペースやfablabは世界的にも増えているが、ここには就労支援窓口があることが特徴的であり、「仕事をもつこと」が社会との接点であり自己成長のために重要であるという、アソシエーションの理念に合致する機能でもある。ここでは日本でいう職業安定所に行く前段階の相談・支援（履歴書の作成方法等）を行っている。職業斡旋所に行くことやそれを見られることを精神的に負担に思う人にとっても、この建物にはいろいろな機能があるため、ここに入るときに「あの人は仕事がないと探しているんだ」とは思われない、という安心感がある。就労のための窓口がこのような日常に根ざしたオープンな場所にあることで、気軽に仕事について相談できる場所となっている。

3) コワーキングスペース（ミコ氏へのインタビュー）

■開設経緯、運営者

コワーキングスペースの運営は、ミコ氏を代表とするアソシエーションが行っている。アレクサンドリアで10年前からに低所得向けの集合住宅の1階の2住戸を借りて「場所と時間、機材を共有する」コワーキングスペースの活動を行っており、ファブラボも経営もしていた。

ファビオ氏と数年来つきあいがあり、地区の家とも色々と一緒にやっていたので、自然な流れで2018年にここに移ってきた。元の場所はかなりきれいではなく、自分のクライアントを連れて来づらかったが、ここにクライアントを連れてくると喜ばれるなど、会員たちにとっては良い効果があった。

■活動の内容

これまでにこの活動に参加、または利用した人は1000

人以上に登る。また、その業種も 100 種類以上である。ここでスタートアップし、今では年収何億何十億の企業に発展した例もあれば、ここで出会ってパートナー組むことになり、出て行った人たちもいる。

イベントをしたり、面白そうな人を引き合わせたりと、人々を結びつけることも重要な役割であると考えて活動してきた。参加している人たちにどんな技術や知識を身につけたいかアンケートを取ると、参加者のなかにはそれがわかる人がいる。そこで、その人に講師になってもらい、お金を取って講習会を開く。そのように、「技術や知識の相互移転」の場としても機能するように運営がなされている。

■利用体系

コワーキングスペースの利用料金は、135 ユーロ / 月で、これは自分で契約するインターネットの利用料金程度の金額である。この金額で毎日いつでも利用することができ、利用料にはインターネット使用料、コピー機使用料、文房具の使用料も含まれている。利用者は自分の PC だけを持ってくれば良い。また、条件付きの一部利用で 10 ユーロ / 月、35 ユーロ / 月、90 ユーロ / 月の価格設定がある。また会議室の利用で時間帯・会員種別によって 5 ～ 25 ユーロの価格設定がある。いろいろなタイプの仕事をする人にとって使いやすいよう、どれくらい使うかを色んな形で決められるように利用体系を設定している。

現在、毎日フルタイムで利用している者は 10 人ぐらいで、パートタイム利用（週に 1 回や午前だけという利用の仕方）が 10 人ぐらいいる。ミーティングルームやファブラボだけ借りる人もいる。

■利用者、多様な利用形態

平均年齢は 40 歳ぐらいであり、フリーランスの人が多いが、企業の従業員もいる。例えば、「北イタリアオフィス（拠点）」を持ちたいシチリアの企業が、フルタイムでデスクを借りてオフィスを構えている例があり、実際にはたまに使われている。宇宙ロケットの部品を作っている会社では、3 人の従業員がこの近くに住んでいるため、ミラノの本社まで出社に及ばずと、3 人用のオフィススペースを借り上げている。いろいろな使われ方がある。

戦略的に、学生の間からの起業や、すでに企業等で働いている人との繋がりをつくることも目標としており、



写真 25 fablab での試作品、練習用習作



写真 26 fablab での試作品を手にするミコ氏



写真 27 ミコ氏へのインタビューの様子

大学にも利用の働きかけをしている。いまは、現役の学生が2人、ここを利用してくれている。

利用圏域としては、基本的にはアレッサンドリアに住んでいる人が利用しているが、なかには30キロほど離れた場所から通っている人もいる。こうした人々は、是非ここに来たい、というよりも、コワーキングスペースが近くにはないのでわざわざここまで来ることになっている。

興味深い利用例として、利用者のなかの2人のアルゼンチン人は、ペルーのコマーシャルを作っている。この人たちは15キロほど離れているところから来ているのだが、アルゼンチンと時差があるため夜ここに来て仕事をしている。このコワーキングスペースが夜でも使えるため、このような利用のしかたが可能になっている。

このコワーキングスペースでは人と人を結びつける取り組みをしていて、お互いない技術を提供し合う取り組みや、さまざまなイベントを行い、新しいビジネスを生み出そうとしている。実際に、この場所での出会いが新しいビジネスにつながることもあり、例えばウェブデザイナーと販売員が一緒になって小さな広告店を作ったという例がある。ミコ氏自身ここで法律家の専門家と知り合って、コンサル会社を作り、別に経営をしている。

■社会的役割

例えばミラノのような大都市で、これと同じようなことをビジネスとして営利目的とする人もいるだろうが、この町で、こうした場所でこの事業を行うことには社会的な意義がある。ここに移ってからは地区の家とのつながりがあるため、社会性をアピールできる機会となっている影響もあり、社会事業としてのコワーキングであることを意識して運営している。ミコさんとしては、こうした新しい場での挑戦が、また新しいことにつながることに意義を感じている。閉じた活動をしていたらダメになる、という認識を持っており、ファビオ氏らと一緒にいることで救われている。

ファビオ氏) コワーキングは必ずしもソーシャルな人たちではない。最初は、自分たちのアソシエー

ションは社会的な役割をもつソーシャルの仕事をしているが、ミコ氏らは利益を求める人たちであり、自分たちとは根本的理念が異なると思っていた。10年前の収支バランスを思い返してみると、当時の収入源の80%は公的資金、20%は私的資金(投資等)だったが、ミコ氏と知り合うことで、活動資金を集めることについての視野が広がった。ただソーシャルの仕事をして生き延びるわけでない、ただ利潤だけ追求するのではない、それぞれの組織が、いろいろな仕事や、いろいろな側面を持っているのだなとわかった。今は、アソシエーションの活動資金の55%が公的資金、45%が私的資金調達である。資金調達以外にも外の拡がりとして、まちでお店を営み商売をしている人々や、企業の人々とも仕事ができるようになった。これは、ミコ氏と会って視野が広がったから。これまでは、自分たちは他の分野の人たちと「競争」をしていた。一方で、コワーキングでは「一緒に働く」。ここでの活動を通して、一緒にやるのがどれほどプラスかを学んだ。